

あ と が き

ある課題が示されると、「自分ならどう考えるかな？絵や言葉でかいてみよう。」「さんの考え方をどう思う？他の方法でも説明できるかな？」「さんの頭の中を想像してみよう。さんはどう考えたのだろう？かわりに説明できるかな？」と教師が働きかける。また、グループやペアの子ども同士で、「さん、それは、～だと思うよ。」「そうかな。でも、ぼくは、～だから、～だと思うよ。」こんな自然な対話で、子どもたちの考えがどんどん広がっていく。

これは、本校の教室でくりひろげられている日常の授業の光景である。一人年2回の授業公開も、なんら構えることなくこのような普段着の授業であり、放課後に行われる授業の協議会とは言えば、これまた、教科にかかわりなく一人一人が勝手なことを言い合う。しかし、敢えて言えば、この普段着と勝手さが、つまり、このカジュアルな研究スタイルが、本校の授業を見つめ直す研究の真髄でもあった。

勝手といえはあまり聞こえはよくないが、意図しているのは、それぞれの教師の専門教科にかかわりなく、「授業の中の子どもの発言や疑問、つまりきという具体的事実から、子どもの学びを語る」ことを前提として、お互いの考えを交換し合い、そのことにより教師も学び合い高め合おうということである。一見、迷走しているかのように見えることもあるが、どの協議からも共通して明らかにされるのは、子どもの学びを追求することは、即ち、私たち教師自身がいかにして子どもの思考を読み、子どもの心の壁にくいこんでいったかどうかということだ。このことは、とりもなおさず、授業の原点を見つめ直すことであり、授業改善の確かな土台となることでもある。私たちの多くは中堅教員として授業のノウハウならそれなりに知り尽くし、これまでの実践の積み重ねに裏打ちされたある程度の自信を持っていいはずであった。しかし、この研究をとおして、子ども同士の学び合う関係作りについて深く悩み、自らの授業観を見つめ直し、めざす学びの姿を追求すればするほど、新たな課題を抱え込むことになった。だが、これもまた、この研究の成果ともいえるのではないか。

私たちは、いま、この研究から得たものを一人一人の授業作りの土台として、教科の本質に迫るよりレベルの高い授業力を獲得すべく、更なる教師修行を続けていこうとしている。

(教頭 富樫 弥恵子)